

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 大清水 裕

本論文は、ディオクレティアヌス帝（在位 284-305 年）による地方統治機構改革が、都市と帝国の関係にいかなる影響を与えたのかを、主として帝国西方の諸都市について探究したものである。「3世紀の危機」を経て都市は自治を失い、帝国による直接管理が強化されていったとする通説に疑問を呈し、主に碑文史料の実証的分析によって両者の関係性を明らかにしようと試みている。

第1部（第1～4章）ではイタリア管区内の、また第2部（第5～9章）では北アフリカの諸都市について、それぞれ考察が行われる。これらの地域に残された顕彰・建築碑文は、皇帝による都市の支配強化を示す証拠とは言えず、むしろ、都市参事会や都市住民が主体的なイニシアチブによってみずからの利益を追求していたことを物語る。他方、第3部（第10～11章）であつかわれたヒスパニア、ガリアおよびゲルマニアの諸地域に残された碑文史料の多くは、皇帝による軍事施設建設を記録したり、属州総督や前線指揮官が皇帝を顕彰するものであり、これらの地域では皇帝主導で都市領域の再編成が進められたことを推測させる。要するに、イタリアや北アフリカにおける諸都市は、ディオクレティアヌス帝改革を経た後も、ひきつづき広汎な自治を享受し、帝国当局による都市への介入は限定的であったと考えられるのに対し、ヒスパニア、ガリア、ゲルマニアにおける諸都市は、「ローマ社会」の一員であることをことさら表明する意義を見失い、帝国中央への関心を失いつつあった、と結論づけられる。

本論文は、ディオクレティアヌス改革の意義を、都市住民の立場に視点を置くことにより、独自の観点からとらえ直し、通説に重大な変更を迫ることに成功している。きわめて広範な対象を微細な論点も漏らさず探究し、その結果大作といえる内容にまで発展したにもかかわらず、マクロな視点から設定された帝国と諸都市の関係性という問題に首尾一貫して取り組み、それに答えることに成功したことは、本論文筆者の構想力の強靱さを示すものとして高く評価される。何より膨大な研究史の蓄積を目配りよく整理し、同様におびただしい数の碑文史料を、現地調査をふくむ収集によって網羅的に精査し、それに基づいてきわめて堅実な実証を行っている点で、筆者の分析の手法は信頼できる。

大作であるがゆえに若干記述の重複が見られ、また都市概念や碑文史料の限界について方法論上やや弱さを感じさせるとはいえ、全体の論旨は明快で文章は平明である。最新の研究動向をふまえた上での新知見が数多く提示され、とくに碑文習慣の問題とからめて議論を進めている視点は独創的で、この分野の研究にもたらす貢献は大きく、本論文は博士論文としての水準に十分達しているものと認められる。

よって審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位に値するとの結論に達した。